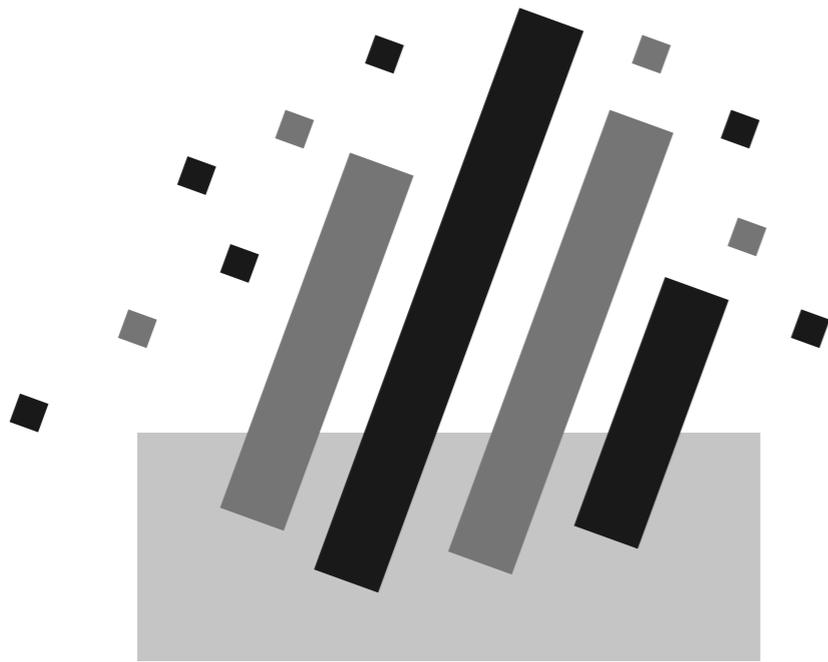

月 刊

MAROAD

Vol. 171



2022.03.27

詩と評論

月刊「Maroad」

Vol.171.2022.3.27

「月刊まるびと」編集部

安西佐有理 訳

アイザック・ローゼンバーグ「戦争のしらせを初めて聞いて」(1914)

On Receiving the First News of the War

Snow is a strange white word; No ice or frost Has asked of bud or bird For Winter's cost. Yet ice and frost and snow From earth to sky This Summer land doth know; No man knows why. In all men's hearts it is: Some spirit old Hath turned with malign kiss Our lives to mould. Red fangs have torn His face, God's blood is shed: He mourns from His lone place His children dead. O ancient crimson curse! Corrode, consume; Give back this universe Its pristine bloom. Cape Town, 1914	雪は白くて奇妙な言葉 どんな氷や霜であれ 蕾や鳥には求めない 冬の犠牲になることを それでも氷と霜、雪を 大地と空のう上にまで この夏の国は知っている 人は理由を知らないが あらゆる人の心には なにやら古来の霊がいて 悪意に満ちたくちづけで 僕らのいのちを穢させる 顔を引き裂く赤い牙 神は血潮を流された 孤独な座から悼むのは 死んでしまった子どもたち ああ、いにしへの深紅の呪い! 蝕むがいい、食いつくせ 宇宙に返してやってくれ 原初の無垢に咲く花を ケープタウンにて、1914年
---	---

◆Isaac Rosenberg (1890~1918)

詩人、画家。第一次世界大戦に従軍して作品を遺した英国詩人の代表的なひとりとして知られる(彼らの叙事的な定型詩が、アメリカのモダニズムとは異なる「英国のモダニズム詩」なのだとの見方もある)。リトアニア系ユダヤ人移民の家庭に生まれ、戦争には道義的に反対であり、健康や体格面でも恵まれなかったにもかかわらず、貧困や就職難などから1915年に入隊。フランスに渡った後、時には入院しながら戦場でも詩作を続けるが、1918年に戦死。病弱のため、姉の住む南アフリカで転地療養中に書いたのが上記の作品。「厳寒」の歴史到来を思わせる開戦は1914年7月。英国からすれば温暖な南アでは、真冬にあたる季節であった。

「月刊まるうど」171号 目次

詩・俳句・小説

同心円	野口裕	4
モルトフ・カクテル 詠(俳句)	岩脇リーベル豊美	5
十七文字の反戦(俳句)	我句灯の会	5
夭逝のはずだったのにアラコキ	前田雅正	8
たたみかける	にしもとめぐみ	9
『マルクスの場合』—「犬の系譜」①(小説)	諸井学	10
ベンチ	中嶋康雄	12
分泌されるわたし	大橋愛由等	13
蝸集ソネット	大西隆志	15

ART NOTE

珈琲タイムレッスン(大人の絵画教室)③……………はらだてつろう 7

英詩翻訳

連載2回目/アイザック・ローゼンバーグ「戦争のしらせを初めて聞いて」……………安西佐有理 3

連載小説

14回目/「海猫堂店仕舞記」……………千田草介 11

連載 評論・エッセイ

益田っこ通信 89号	元正章	4
阪神・淡路大震災と有田焼	モス堀淵敬子	6
想像力の彼方に〈11〉	大西隆志	14
神戸詞あしび	「一遍や親鸞を包摂した阿弥陀信仰の善光寺へ」	大橋愛由等 16

編集部日より★92/77年間つづいた「戦間期」は終わりを告げたのだろうか。「ウクライナ戦争」が長期化する様相を呈してきた。短期決戦による首都キエフ陥落を目指したと思われるロシア軍だったが、ウクライナ軍の頑強な抵抗にあい、開戦一カ月を過ぎても、首都攻略にはいたっていない。一方でウクライナ東部ではロシア軍による占領地域が増えていることもあって、戦線が膠着することが予想される。いま、日本や欧米に生きる人たちは、この戦争を〈専制主義国家 vs 民主主義国家〉の戦争と位置づけて、帝国主義的侵略戦争を画策したプーチン大統領を、とんでもない戦争犯罪人と決めつけている。もちろん軍隊による民間人殺害はあってはならないし、突如日常生活が破壊されたウクライナの人たちの苦難を思うと、遠く日本に住んでいるわたしもいてもたってもいられない心情となる。しかし、である。ロシアでは約6割の国民がプーチン大統領が起こした侵略戦争を支持しているのである。もちろん徹底した情報統制を敷いている国家なので、国民は真実を知らないだけかもしれない。しかし、日本国内において、先の大戦では、国民のほとんどが、「鬼畜米英」に勝利するために、「1億総火の玉」となって戦争遂行に協力していたではないか。その戦争は「太平洋戦争」と名付けられているが、われわれ日本人はアジアに侵攻して、「大東亜共栄圏」確立の「大義」のためにアジア諸国を蹂躪してきた。77年前まで日本国とわれわれ日本人は、帝国主義的侵略戦争を国民の殆どの「支持」をもとに遂行していたことを思い起こすべきだろう。そして、国民を扇動し、戦争遂行を画策した当時の軍部や支配者階層を、われわれはどれだけ断罪できているのだろうか。／世情騒乱の今月、第一部読書会の語りては、小辻昌平さん(直木三十五記念館事務局長)です。テーマは、「大衆文学について」です。(大橋愛由等)

▼プーチン、汝権力への意志に憑かれたるかや
〈2022.03 半ば(パートII)〉

世界中を震撼させて余りあり、なおかつ批判の対象は集中砲火を浴びるほどにプーチンに向けられているのに、今もウクライナ情勢は予断を許さない。なのに彼は泰然自若として悔いるところがない、そこが疑問であった。彼の野望が、かつてのソビエト連邦帝国の復興と栄光を望んでいることは周知の通りであろうが、一国の独裁者として君臨し続けていくためには、そこに哲学があるはずだ。それをニイチエの「権力への意志」(我がものとし、支配し、より以上のものとなり、より強いものとなろうとする意欲。善とは何か―力の感情を、力への意志を、人間のうちにある力そのものを高めるすべてのもの)に求めたい。つまるところ、彼は自分自身がロシアの国と一体化して、その救い主たらしめて暴虐の限りを尽くしている。盲目の「裸の王さま」となったとしても、恐れるに足らずである。そのような男には、市民の日常生活の光景など眼中にない。その限り「助けてください」という無辜の市民の声など耳に入ることはない。生き馬の目を抜くような熾烈な権力闘争を戦い抜いた男の生きざまにとつて、「悪とは何か―弱さに由来するすべてのもの」(『アンチクリスト』)となつて何ら不思議でもない。人の人としての心を失つた彼に(理解されることはないだろうが)、源実朝の歌(百人一首所収)を与えたい。

世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ あまの小舟の 綱手かなしも
世の中は常に変わらないものであつてほしい。浜辺を漕ぎ行く漁師の小舟が綱に引かれている、そうした光景を見るにつけ心が動かされる。

◆同心円

野口裕

同じ点から進んで行く縁が
徐々に離れて過去と未来を指す
波紋のように見えるが
実は声なのだ

◆モルトフ・カクテル詠

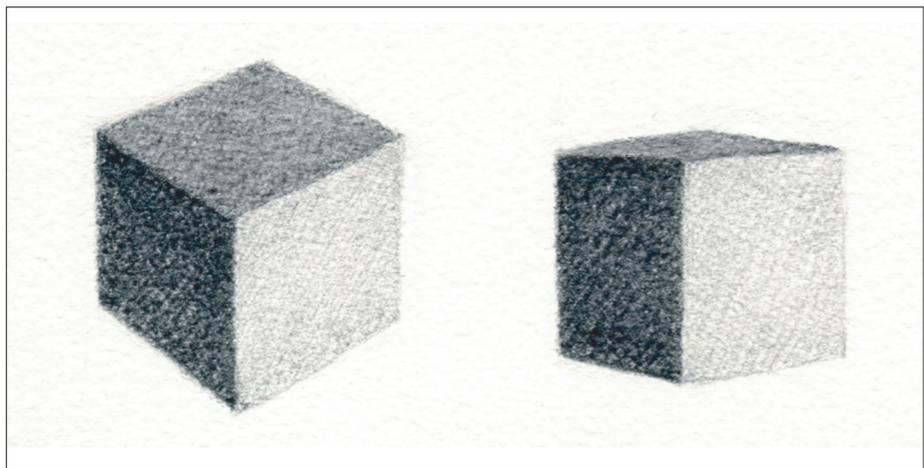
岩脇リーベル豊美

編みかけの毛布編みながら逃げる
モルトフ・カクテルに配合する冬童
潔白なるヒヤシンスに赤き春時雨
迷彩服兵士アイス舐めワイン酌む春コート
青黄のナンバープレート通るまえと通つてから
海底ケーブル混線したのと電話の嘘
心痛むと片付けて穀倉地帯の飢餓
ワルシヤワまで逃げた母子ベルリンに送る
いたずらに重ねる春秋を砲声一瞬で
銃向に躊躇う有明の月燃え尽き

◆十七文字の反戦

我句灯の会

支援の輪広がりにきて花便り (粗公)
啓蟄や戦場の土まだ溶けず (夏生)
傍観の我が身疎ましキエフの春 (古道)
春の空ダモクレスの剣隠し持ち (華泉)
外つ国のスピーチ届き草萌える (丹月)



3

珈琲タイムレッスン（大人の絵画教室）

レッスン1-2の反省

- ・なめらかな階調になりましたか？
- ・画面を手で擦るとボケたような感じになります。
- ・筆跡の密度が完成度の高さや質感に関わってきます。
- ・明るく、高い密度で描くには鉛筆の種類を使い分けること、鉛筆を軽くリズムミカルに使うことです。

○レッスン 1-3 立方体（単体）

- 1 明暗・立方体
 - ・三段階の明暗です。形は立方体を使います。
- 2 立方体を描く（課題の目標）
 - ・レッスン1-1で描いた三段階の明るさをつくることができれば立方体を描くことができます。立方体は正六面体ですが、三面の明るさで描くことができます。二面しか見えない位置もありますが、三面が見えるように描いてください。
 - ・右上、手前からの自然光を想定してください。
- 3 注意点（ヒント）
 - ・定規を使って立方体を描いてもよろしいが、できるだけフリーハンドで正確に軽い筆致で描きましょう。
 - ・立方体の輪郭とY字形の角に黒い線を入れないように仕上げる。

はらだてつるう（美術家）

最近、また日本各地での地震が増えてきた。27年前の1995年1月17日、私はアメリカにいたが、その9日前まで日本にいた。珍しく年末年始を日本で過ごすために1994年12月1日成田に着いて、数日間浦安や東京に滞在した後、実家のある西宮に向かった。その年の11月から12月にかけて北海道や青森で地震が続いて起こっていたので（次は東京かな）なんてぼんやりと思っていた。まさか兵庫県であんな大きな地震が起こると思っていなかった。

阪神・淡路大震災と有田焼 ⑬

モス堀渕敬子

がわかった。家も壁に少しヒビが入った程度ですんだという。

久しぶりにお正月を実家で過ごし、母の作ったおせち料理に舌鼓をうち、近くの神社で初詣もすましてきた。

お正月ということで、母は一番いい食器、有田焼の食器を出していたのだが、「誰かがガチャガチャと流しに置くから、端が欠けてしまった」と私に愚痴をこぼした。私を疑っていたのだろう。でも確かじゃないので、私は黙るしかなかった。

そして1月9日にアメリカに戻ったのだが、16日の夕方テレビをつけ、NHKの国際放送を観ていたのだ

が、画面だけで音声が出ない。その画面も、町の所々で火の手が上がり、電車が脱線しているではないか。（一体何が起こったの？）と思っっていると電話が鳴った。NTT長田から、アメリカと日本の合弁会社に出張で来ている若い日本人男性からだった。

彼が言うには、兵庫県で大きな地震があつて、彼の神戸・長田の実家も被害にあつたという。彼は私の実家が西宮にあるというのを知ってかけてくれたのだ。すぐに実家に電話するが、通じない。

それで浦安市の友人に連絡して、西宮に電話してもらうと、なんとかみんな無事だということがわかった。家も壁に少しヒビが入った程度ですんだという。

しかし、普段使いの食器だけでなく、母の自慢の例の高級食器は全部割れてしまった。まあ、食器ぐらいですんでよかつたと思う。

同じ年の9月、私達は再び日本を訪れた。夫が先にアメリカに戻った10月の何日だっただろう。時差ぼけもあつて夜中の2時に目が覚めてトイレに行ったら家が揺れた。1月の地震の余震だった。西宮でも震度4の揺れで1人亡くなったという。

2014年赤穂市に家を建てたが、地震を考慮してヘーベルハウスにしたし、地震保険にも入った。これ以上大きな地震が起きないのを願うばかりだ。

◆天逝のはずだったのにアラコキ

前田雅正

ぼくは生まれた時
二〇〇〇グラムほどの
未熟児だった
近医はこの子は
育たないだろうといった
しかし保育器にも入らず
なぜか生き残った

しばらくして
おやじの結核がうつり
肺門リンパ腺となった
さきの近医は手の打ちようがないと
治療を拒否してさじを投げた
たまたま産科医だった叔父が
死んでもやむを得ぬ了解のもと
僕の腕より太い注射を打ち
卵を呑んだ蛇のような腕になりながら
またしても生き残った

でも大人になるまでは
生きないだろうとの見立てであった
いつ結核が再発するかわからぬ
予後の非常に悪い病気だったのだ

幼年時代は
年の三分の一ほどは

病臥している子供だった
厳しく育てられた兄とは異なり
親には勉強しろとも
しゃんとしろとも
何にも云われなかった
兄はその辺の事情を知らずにいて
六〇年以上たった今でも
不公平な扱いだった親を
恨みに思っていたようだ

二五歳の時
ギランバレーを患い
またしても命の危機に陥った
手も足もだんだん動かなくなり
箸も持てなくなった時
今度こそダメかと思った
筋肉の萎縮が肺まで行くと気管切開
心臓まで行けばおしまい
でもまたしても生き残った

二五歳を過ぎれば
もう天逝ではないと思った
死と対峙した
それまでの緊張が嘘のように
その後はフワフワとのんびりと生きた
気が付くと間もなく古希となる
アラカンを通じてアラコキだ
思いもかけず長く余生を送ったが
ぼくはいつたい何を為したのだろうか

◆たたみかける

にしもとめぐみ

君のからだの温もりで目が覚める 火と燃える命の熱さよ
守り 支え 繋ぎ 笑顔が世界にあふれますように 手を
さしのべる人がいつもかたわらにいますように それでも
ひとりでも 前をむけますように 命が 命を生み続ける
愛おしく 哀しい 切ない命よ どどっ どどっ どどっ
どどっ どどっ どどっ どどっ 鼓動よ続け 生きろ

ある夜、家に泥棒が来て、倉庫の窓から毒入りの肉をハチに与えようとしたらしい。しかし、ハチは足元に投げられた肉を口にする事もなく、また吠えることもなく、唸り声をあげて泥棒を追い払ったらしいのだ。

というのは、同じ夜、同じ手で近所の衣料品店に泥棒が入ったという。何々を盗られたらしい、金もやられたらしいと、大人たちが賑やかに言い合っていた。その番犬はあえなく毒殺されていたという。わが家にも警察が来て、父から話しを聞いたあと、その毒入りの肉を持ち帰った。

祖母はその夜のハチの武勇伝を近所の八百屋や魚屋で盛んに喧伝した。

「泥棒がなあ、窓から毒入りの肉を放ったけど、ハチは見向きもせず泥棒に唸り声を上げたんや。吠えたんと違う、唸って泥棒を追い払ったんや」

祖母はまるでその場で見ていたかのように自ら脚色し、みんなに吹聴した。

ハチは近所で英雄になり、近所の犬たちを支配したようだ。子分もたくさんできて散歩の道すがらあちこちの犬がハチに挨拶をした。学校帰りに八百屋の裏庭で、鎖で繋がれた犬にのしかかって懲らしめていた。「ハチ！」と声をかけたが、わたしの方を振り向いただけで襲い続けた。余程のことがあったのだろう。ハチにはハチの事情があるのだ、と納得して家に帰った。

そんなハチは、冬の朝、倉庫の隅で身を隠すようにして死んでいた。

わたしが小学二年生のときだった。わたしが学校から帰って、ハチに挨拶しようと犬小屋へ行くと、いつもと違って小屋の中でぐずぐずしていた。わたしが再び呼びかけるとのそりと出てきた。少し弱っているようには見えなかったけれど、そのときまさか死ぬとは思わなかった。

祖母は「ハチが死んだ」「ハチが死んでもうた」と近所に言いまわった。その姿はいつもの祖母とは違って声がかすれていた。

祖母は裏庭の板塀の隅に、住み込みの店員に穴を掘らせた。

「キーやん、すまんけど、もうちよつと深こう掘ってか！」

祖母は四肢を伸ばして横たわったハチを抱えて、穴に放り込んだ。ハチはすでに硬直していて、黒い土の中で物体になっていた。キーやんが慌てて土をその上にかけて、埋め戻した。最後は祖母がスコップを手にして土塚にした。祖母の頬に涙が流れていた。

すべてが終わると、祖母はしゃがみこんで蠟燭と線香を立て、数珠を手にして経を読んだ。ナンマンガブ、ナンマンガブ…。仏壇の前でするように、わたしも祖母の隣で両手を合わせた。

海猫堂店仕舞記⑭

千田草介

〈戦隊〉とはいえ非暴力主義に徹して、敵と戦う手段はクイズだという〈機動星隊シゴセンジャー〉。およそ十人ほどといわれる構成員の一人を私は知っている。猫を十匹ばかり飼っている少女で、あるとき彼女が天文学館裏一帯で〈子午線〉を猫たちに食べさせているのを見かけ、猫たちがあまりにも美味そうにむさぼっていたものだから、食べ残しの〈子午線〉をこっそり拾って帰り、猫まんまに入れてチャンドラに食べさせてやったという次第であった。東経一三五度の位置で食べれば無害だが、ちよつとでもズレると毒性が生じるということを私は知らなかった。鼠と馬が天体望遠鏡をのぞいている絵をあしらった〈子午線〉のパッケージの裏には経度が外れることへの注意書きが記されているが、定価一三五円をケチったがためにチャンドラを苦しめることになってしまったのである。

〈シゴセンジャー〉は時と宇宙を守るべく、宿敵〈ブラック星博士〉と、まるでインドラとアシウラのような永劫の闘いをつづけているといわれるが、私は戦闘の現場を見たことは

ない。ただ、ブラネタリウムから星をせしめようとするれば、かの宿敵同士がたちまち共闘して防衛にあたるであろうことは容易に想像できる。

「ともあれ、クイズ合戦を制しなければ、星の獲得はむずかしいでしょう。ダジャレを並べる〈ブラック博士〉への対処も考えないと」

「たとえば、どんな仕掛けをしてくるのかね」ミロクさんがたずねた。

「なぜ夜空に便座がないのか、とか」

「ギリシアの神々は大便などせんということだろう。もつとも神といえどA感覚は持っているはずだがな。黒博士とやらは坂口安吾の〈風博士〉のたぐいかね？」

「双子座の二人が喧嘩したら何座になる、とかいう問いを仕掛けてきます。それにダジャレで応じなくてはなりません」

「それは難問やな」

「イザコ座、が答えです」

「あほらし」ミロクさんは鼻白んで顔をゆがめた。「なにはさて、月照寺へ行ってみよ」と、チャンドラが言った。「天文学館を見下ろして策を考えたらええやん」私たちは山陽電車に乗り、〈人丸前〉駅で降りた。

(つづく)

◆ベンチ

中嶋康雄

ひっかき傷がついている
角のペンキが剥けている
つまらない蝶が
とまりそうでとまららない
鳥の糞もこびりつき
なまぬるい雨の日には
虫がべちゃべちゃ死んでいる
ベンチの隣に
ベンチがあり
その隣に
ベンチがあり
ひっかき傷が
少しずつ
違っている
蟻が一匹迷っている
電車がやってくる
ドアが開いてすぐ閉まる
定刻に
すずめ一羽
蟻をついばむ
うすよごれ
おばあさんが
ベンチにすわって
うつむいている
こどもたちがよけている
よろしくお願ひします

何度も何度も頭をさげる男がいる
こどもたちが男を横目で見ながら
怯えている
スマホの画面で
なにかを捜している
画面がすこし笑っている
指先が吸い込まれ
もやもやしている
やつと電車がやってくる
扉から冷気を吐き出す
空気がゆがみ
ゆがみ
スマホに
頭が飲み込まれ
まちうけ画面が波打っている
すぐに
胴も
足も
消え
髪と鞆が
残され
鞆の中身がはみ出ている
こどもの
名前が
恨んでいる
ベンチの
傷が
逃げてゆく
かわりの傷が
用意を始める

◆分泌されるわたし

大橋愛由等

林檎が迂回する
そこには薄い森
見え隠れできない
透徹されるなにもかも
そこには境界が
崩れたままの残滓として
迷路の後始末がいつまでもおわらず
恥辱の風にさらされる
樹々がなにかを怖れ
一斉にとある方向に向き
葉群れの
しるしを一斉に
拒みはじめ
二つであることが
いつのまにか

許諾されなくなることを
無分有であることを
わたし・たちは
しとどに
忍受すべきなのかわからず
朝に交わされた
純水を出自とする
塩とサルサと黒羊たちは
鼎立したまま折り合わず
わたしとあなたのメサの上で
しなやかに厭いもなく
ころころいつまでもころがり
成体に変態することなく
そこに在ること
そこで哭いていることが
午前11時2分を
迎えるための
タイムであろうと
月から毎朝分泌される陰性水を
コップいっぱいにさらしながら
昨日風葬した
四つの詩句がまだ溶解しないまま

ロゴスに変容しようとして
ハタハタと自転しているありよう
鴨ひよどりの片羽だけが
越境していくのを
ぼんやり見つめているのは
詩が六角広場に
群れだして
黒羊が渡河するための
欠かせぬ要素であることと
阿字吽字の
めくるめく
終わりなき抒事的連鎖に
翻弄されるのは
迂回しつづける林檎の
日常から
逃れられない
薄い森に棲むわたし・たちの
すべての花弁に収斂していく
混沌と快楽と差延が
知悉しているのだろうか

これからの仕事、俄然面白くなるだろうと思っていたミュージシャンのやなぎさんが亡くなられた。男女二人組の「やぎたこ」のメンバーでプロデューサー。そして自作曲を歌うソロシンガーでもある。「やぎたこ」は十八世紀より受け継がれ今日まで続いているアメリカン・フォーク、トラッドの世界を多彩な楽器で奏でながら、音楽の歴史なりをタイム・トラベルのごとく実現させてくれるチームで、もちろん歌の言葉は英語で歌われている。ライブ会場では背後に色んな楽器が並び、壮観でもあった。ギターもアコースティック・ギターの6弦だけでなく12弦、リゾネーター・ギターもある。バンドメンバーはフレットレスの瓢箪バンドジョーイなど何種類もあり、ほかにマンドリン、フィドル、マウンテン・ダルシマー、ハンマー・ダルシマー、オートハープ、アコーディオン、目が回りそうだった。それらをとつかえひつつかえ奏でながら、ご近所さんが集まってきた週末の寄り合いに参加しているようでもあった。またもや音楽の話で、一般的でないフォーク・ミュージックについて書いているが、

大西隆志 想像力の彼方に ①

歌の言葉でもある詞に詩についての考察でもあり、ひろい意味での詩にまつわる話でもある。

さて何なんだろうか、ぼくは自身が書いている現代詩と歌詞の関係に長い間悩まされてきた。大上段に構えて論を仕立てるには、知識もなく受け売りの対応しか出来ないのだが、別腹のように食べれない。「詩を書いているのだから、歌詞を書けるだろう」とは、ぼくも音楽をやっていたからよく投げかけられた。かつて流行歌の職業的な作詞家のパターン化した書きようには、なぜなのか違和感を覚えていた。簡単な関係性を説明すると、ぼくにとって詩は韻律からも自由で、散文からも自由なもので、簡単に言葉にすると元々の言葉の纏っていた表情がこぼれ落ちてしまうような気がしている。コミュニケーションをとるにはやさしく分かりやすいもののほうがいいのだが、詩は「表現」として現れることで、いつ何時、ぼくらの前や街角にふと顔を出すのかもしれない。それははっきりとした意匠または衣装で現れてくるか、逆に沈潜した分かりにくさを纏いやつて来るのかも。

名指すと逃げられてしまう小動物のようでもある。ホルヘ・ルイス・ボルヘスの文章に「詩を汲む」とは日常的でもある、と書かれていた。そして詩人というのは、無名の存在であるほうがよいと。職業的な作詞家への反発は、ある種の近代詩人の職業的な匂いに気づいたからかもしれない。久しぶりに富岡多恵子さんの「詩よ歌よさようなら」を読んだ。その中に「今くらい、「詩人」と「作詞家」といわれる歌のメーカーとがかけ離れている時代も珍しいだろう。ある作詞家は、自分の書いた詞がレコードになり、それが売れた時にはじめて詞を書いたという実感が湧くという、また別のある作詞家は、書いた詞が歌になってハヤリ、その歌が自分の方へ帰ってくるリアクションがあつてはじめて書くという行為が終了するというのがあった。(略)「詩人」の詩は、売れることから、受け手のリアクションからも、限りなく遠く離れている。さりとて、「朗読」という、一種の「語りもの」たる芸になることもできない。「詩人」と「作詞家」の距離はますます遠ざかっていく。あつた。確か

近代詩人たちは人口に膾炙される作詞をたくさん書いていた。ぼくが今住んでいる姫路でも、昭和初期から活躍し、治安維持法で起訴された詩人大塚徹さんも作詞家しての顔を持っていた。詩人の竹中郁さんも校歌、社歌などもたくさん書いてた。

この文章を書く切っ掛けになったのは、やなぎさんの最後のソロアルバムとなった『小さな町の小さなライブハウスから』を聞いていたからだ。旅という生活、生活という旅の人だったやなぎさんのこのCDは切実な想いに満ちている。このアルバムのタイトルは、ライターの片山明さんの著書からきている。この中の一曲「貧しい人々」を書き出してみる。

便所の落書きに真実なんてない
汚らしい言葉が並んでいるだけで
高架下のコンクリートの壁に才能なんてない
それはその名の通りただの落書きだ

地下道の段ボールハウスに世捨て人なんていない
そこに居るのは世の中から捨てられた者ばかりだ
最終列車のホームに旅人なんていない
そこに居るのは追い立てられて逃げていく者ばかりだ

僕らはどうしてこんなに貧しくなったのか
僕らはどうしてこんなに貧しくなったのか

パソコンの画面の中に真実なんてない
真実をもてあそぶ悪意があるだけだ
国の最高機関の議事録に正義なんてない

正義をもてあそぶ言葉が並んでいるだけだ

焼け跡から創り上げる街に笑顔なんてない
今日を必死で生きる人達がいるだけだ

そんな今日を生きる人達の
見えない明日を奪う街はまだ大きくなる

僕らはどうしてこんなに貧しくなったのか
僕らはどうしてこんなに貧しくなったのか

売れるものは何でも売ってしまったとばかりに
人を売り 武器を売り 核を売り 種子を売る
しまいにや国を丸ごと売り払って

足元すくわれてもほらほらもう転ぶ場所もない

僕らはどうしてこんなに貧しくなったのか
僕らはどうしてこんなに貧しくなったのか

この時代にこんなに真摯に歌を歌う人がいるのかと思う。キツイ歌が多い感じもしている。なかなか声を上げない今の日本の状況を象徴しているようだ。言葉による「歌」を引き出す力は、やはり歌い手であるやなぎさんの丁寧な言葉を届くようとする力だ。暮らしの中からの飾り気のない歌であり、シンガーの想いだ。やつとやなぎというフォークシンガーにより、日本のフォークソングがリアルに感じられるようになった。それにしても残念だ。

◆ 蝟集ソネット

大西隆志

暗闇のなかに浮かびあがる光
平原を車で走っているのは過去の日
稲光りと豪雨を抜けながら
人の集まる街に向かう

砂漠を横断した時刻に
ミサイルは汚れた街に傷を刻印するのか
磨かれた表面には鍵で引つ掻いた印
ビルの崩壊と重なりアイスクリームがとけ

何も知らないのに光が集まり
街の一廓には悲しい祭りが始まる
賢治の流れる銀河をなぞり

手本は森のなかの山蛭に血を吸われながら
言葉の蛍が湧き出しているようだ
喋りまくる時間が失せるのは許せない



1707年に再建された
国宝・善光寺本堂
本堂で毎朝おこなわれる「朝事」法要
を見学してきた

「朝時」は、天台宗、浄土宗の僧職たちが担当している。ひさしぶりに「生きた仏教」に触れたような気がする。声明をはじめとして、読経のひびきを全身に浴び、儀典宗教としての仏教のありようを感じていた。ただわたしは受容したい仏教はこうした視覚や聴覚に訴える宗教

ではなく、経典は、あくまでも意味を伝えるテキストとしてとらえたい。しかも漢語でみだされたものではなく、サンスクリット語から現代日本語に直訳されたテキストとしてある。つまり視覚・聴覚に訴える儀典宗教としての（ある意味カトリックと通じるものがある）仏教よりも、経典にかかれた意味に直接向きあいたいのである。この意味でわたしは仏像にも興味がない。イコン（聖像）であることには認めるが、信仰の対象として見ていないからである。声明と読経をききながら、この寺が阿彌陀如来信仰の拠点（本尊は一光三尊阿彌陀如来）であることを覚醒する。ただ「朝事」の最中、わたしは〈如来蔵思想〉のことを考えていた。すべての方に仏性があると肯定した仏教思想で、中観や法相のようにひとつの哲学的宗派をなすことはなかったが、大乘仏教に大きく影響あたえたコンセプトであることは確かなのである。門前を歩いていると、親鸞が長逗留した場所を確認できる。わたしが気になっていたのは、一遍がこの阿彌陀信仰の拠点を訪ねた事績がどこにあるのかということだった。一遍は1271（文久8）年と1279（弘安2）年の二度にわたって参詣。『一遍聖絵』にも善光寺の往時の姿が描かれている。ここで踊り念仏をしたのかどうか知りたかったのだが、『一遍聖絵』には描かれていない。この善光寺という仏教メディアには親鸞や一遍を包摂してあまりある阿彌陀信仰の包容力があるのかもしれない。旅の一番の目的地は善光寺ではなかった。同寺の東隣りにある長野県立美術館で開催されていた「松澤有生誕100年回顧展」を観るためである。松澤宥（1922-2006）はコンセプチュアルアート（概念芸術）の表現者のひとりである。

一遍や親鸞を包摂した 阿彌陀信仰の善光寺へ

はなかつたが、大乘仏教に

思い切って旅に出ることにした。二年続きで〈奄美ふゆ旅〉を断念したことで、旅という日常から超自する異化行為に飢えていたのかもしれない。一月の但馬行きにつづいて、三月はゼロ泊二日の旅程で長野市に向かった。いずれも奄美とは間逆な北国であり雪国である。午後八時二〇分に神戸・三宮のバスターミナルを出発した深夜バスは、九時間をかけて早朝の長野駅に到着する。夜明け前だった。積雪はないものの暖かい神戸からすると真冬の気温である。まず向かったのが、善光寺。かつて学生時代に訪れたこともあると記憶しているが、それがいつのことだったのか、覚えていない。国宝の本堂で毎日行われる午前六時半からの「朝時」を見学する。この寺は、中世までの東大寺のように、特定の宗派に属していない仏教寺院の原初的な体裁を保っている。

はなかつたが、大乘仏教に大きく影響あたえたコンセプトであることは確かなのである。門前を歩いていると、親鸞が長逗留した場所を確認できる。わたしが気になっていたのは、一遍がこの阿彌陀信仰の拠点を訪ねた事績がどこにあるのかということだった。一遍は1271（文久8）年と1279（弘安2）年の二度にわたって参詣。『一遍聖絵』にも善光寺の往時の姿が描かれている。ここで踊り念仏をしたのかどうか知りたかったのだが、『一遍聖絵』には描かれていない。この善光寺という仏教メディアには親鸞や一遍を包摂してあまりある阿彌陀信仰の包容力があるのかもしれない。旅の一番の目的地は善光寺ではなかった。同寺の東隣りにある長野県立美術館で開催されていた「松澤有生誕100年回顧展」を観るためである。松澤宥（1922-2006）はコンセプチュアルアート（概念芸術）の表現者のひとりである。

一誌名変更のお知らせ

ながらく誌名を「月刊 Mélange」としてきましたが、170号から「月刊 MAROAD」に変更しました。これは、「月刊 Mélange」発行当時（2005年）から17年が経過して、参加構成メンバーが入れ替わり、現在の誌友・詩友たちとの連帯を確認し、今後の表現活動の切磋琢磨を願うために変更したものです。（大橋愛由等）

2022年03月27日 通巻171号
発行所/月刊「まろうど」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価 660円(税込)